

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第418号 平成24年10月22日

マスコミの本質が問われている

週刊朝日の記事を巡って、親会社の朝日新聞が謝罪し、週刊朝日は連載中止に追い込まれるという事態になっています。

朝日新聞並びに週刊朝日は、問題となった記事の当事者である橋下大阪市長の取材拒否をはじめとする反撃に屈したという事でしょうか。あるいは、世の中の反響の大きさに驚いたせいでしょうか、いずれにせよ、誠にお粗末としかいいようがありません。

問題の発端は、10月26日発行の週刊朝日「ハシシタ 奴の本性」というタイトルの連載記事にあります。この記事を書いたのは、ノンフィクション作家の佐野真一氏と週刊朝日取材班となっています。

私は週刊誌には関心がありませんし、ほとんど読まないのですが、週刊朝日の新聞広告を見て、その表題の異常さに驚き、早速読んでみました。そして、どうしたらこんなにも口汚く人を罵る事が出来るのだろう、というのが率直な感想でした。特に、橋下市長は「ハシモト」と呼ぶことを承知の上で、橋の下をあえてイメージさせるように「ハシシタ」と表現する下劣さには、怒りさえ覚えます。

週刊朝日が今回の記事を連載しようとした意図は何処にあったのでしょうか。記事の中では、橋下市長の政治手法を検証することではなく、橋下徹という人間そのものを解明したいということであり、その為に彼の血脈をたどる取材をしたとあります。

橋下市長の政治的な手法言動に対して、それを支持する人が多い一方で、批判的に見ている方も少なくありません。

こうした中、朝日新聞や週刊朝日が橋下市長の政治的スタンスや言動をどう批判しようとも、それはマスコミとしてのそれぞれの立場からのご発言であり自由にされたら良いし、少なくとも、発言そのものが制約されるような事があってはなりません。

しかしながら、「何処に生まれたか」という、本人の努力では如何ともし難い問題や、本人に何の責任もない事を取り上げ、それをあげつらって批判する事は、まさしく差別意識そのものであり、決して許されるものではありません。特に、彼が被差別部落出身者であるから人格的に問題があるかのような論じ方は誠に異様であり、

問題だと思えます。

現代においても、依然として被差別部落出身者というだけで、いわれなき差別を受けているという事例があることは、マスコミ関係者なら当然知っているはずで、週刊朝日編集長の「私どもは差別を是認したり、助長したりする意図は毛頭ありません」というコメントは虚しく響きます。もし、本当にそうなら今回のような事にはならなかった筈だと思うからです。

今回は、比較的早い段階で週刊朝日だけでなく、親会社の朝日新聞も謝罪すると共に、連載の中止を表明しました。橋下市長もこれでノーサイドだとしているようで、この問題は収束に向かうことになるのでしょうか。しかし、記事に書かれた当事者が橋下市長ではなく、我々のような誠に小さな存在だったとしたらどうなっていたでしょうか。彼らは、早々に謝罪し、連載を中止したでしょうか。私は、彼らの人権感覚からすると、多分違う結果になっているのではないかと疑っています。

というのは、佐野氏や週間朝日等のコメントを見るかぎり、謝罪しているのは「同和地区などに関する不適切な記述」についてであって、橋下市長に対して「血脈をたどって批判する」という手法自体を反省しているようには感じられないからです。今後再び同じような問題が起こらないよう、関係者の方々には今回の問題の本質をとらえ直し、再発防止に取り組んで頂きたいと思えます。（塾頭：吉田 洋一）